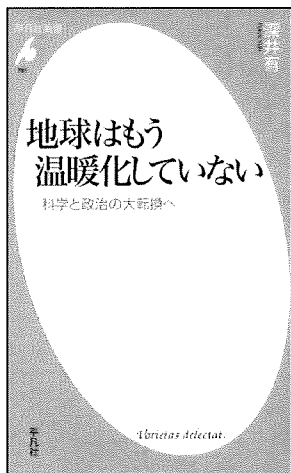


紹介

地球はもう温暖化していない
—科学と政治の大転換へ—

深井 有



平凡社新書, 2015年10月発行, 新書版,
247ページ, ISBN-10: 4582857914,
定価820円(税別)

ここ十数年, 日本では地球温暖化防止とCO₂削減の国民一丸のキャンペーンが激しい。私は2009年に本欄で「地球温暖化論に騙されるな」(丸山茂徳)を紹介し, その後内容を補充し, 文献表を加えた英語版を米国で出版した。その日本語版は2015年に出版されたが(東信堂), IPCC第5次報告書(2013-2014)や, 2008年以降の重要な研究成果はごく一部しか取り入れることは出来なかった。本書は, この丸山本と基本的に同じスタンスと内容を持っているが, IPCC第5次報告書と2015年までの多数の文献を引用して最新の研究成果を踏まえた議論を示しており, 地球温暖化論争の理解に大きく役立つ書となっている。

本書では, まず巻頭に決定的なカラー口絵3枚が示されている。口絵1は衛星観測により, 1982年~2000年の間に地球の植生被覆率がほぼ全域にわたって増加していること, 口絵2は多数の気候モデルによる地球の平均気温変化と, 実測値との乖離が2000年以降年々大きくなっていること, 口絵3は太陽活動の衰退により, CO₂量が増え続けても, 2020年

ころからは温暖化でなく寒冷化が進むと予測されることを示している。まえがきでは, 上の口絵を効果的に参照して, 本書の訴える重要なポイントが下記の5項目にまとめられている。

1. IPCCの気候モデルとCO₂温暖化論の破綻は明らかであり, IPCC第5次報告書の本文ではそのことへの認識が記述されているにもかかわらず, 同報告書の政策決定者向け要約では, そのことに触れず, 破綻している気候モデルによってCO₂温暖化進行の脅威を一層強調している。2. そのような虚構のCO₂温暖化対策のために, 日本政府は巨額の無駄遣いをしており, 国民の逸失利益は一人当たり年間20万円にもなる。3. CO₂の増加は地球の植生増加をもたらすし, 地球温暖化も同様で, 歴史的にも人類繁栄の時期と一致している。つまり地球環境にとって脅威でなく, 歓迎されることなのである。4. 気候変動を支配しているに違いない太陽活動は200年ぶりの急激な変化を見せ, 今後数十年から100年にわたって弱まり, 小氷河期の到来を予測させている。つまり寒冷化が間違いなくやってくると予測されるので, 人類はそれに備えねばならない。5. 欧米ではCO₂温暖化論への批判意見がメディアに度々とりあげられ, 地球温暖化対策, CO₂削減政策が学会や政府レベルで見直されつつある。しかし一方日本では, 政府・メディアが一体となって世論をつくり, 反論を許さない社会風潮となっている。そして, このことについては, とりわけジャーナリストの責任の重さが指摘される。

本文では以下の4章16節, 20項目にわたって上の指摘について裏付けとなるデータ・文献を示して詳しい説明がなされている。

第1章 CO₂温暖化論が破綻するまで

変わりつつある「地球温暖化」(日本の常識は世界の非常識/聞こえてきた寒冷化の足音), 2. 温暖化とCO₂は関係ない?(気温は18年前から頭打ち/過去の気温変化はCO₂と無関係), 3. IPCCは何をしてきたか(IPCCの見解の変遷/現実との乖離は進む), 4. IPCC第5次報告書を読み直す(気候モデルへの過信/大きすぎる気候感度/気候モデルの弱点①水蒸気的作用/気候モデルの弱点②雲的作用/隠された根本的欠陥), 5. 気温データは正しいのか(クライメートゲート事件/流出メールから読み取れること), 6. 俗説を排すために。

第2章 太陽が主役, 新しい気候変動の科学

1. 地球の平均気温を正しく知ろう(体験的温暖化は都市化によるもの/本当に信頼できるのは海水温と衛星測定), 2. 地球気温の温故知新(古気候学から学ぶ小氷河期の気候), 3. 地球を知るために太陽を知ろう(太陽のかたち/太陽風と太陽磁場/宇宙線の振る舞い/今後の太陽活動はどうか), 4. 太陽はこうして気候を決めている(太陽活動と気候の密接な関係/気候と銀河

系との関わり/雲はどのようにできるのか), 5. 太陽は200年ぶりの大変身—気温は頭打ちから寒冷化へ(過去160年の気温変化を解析する/今後100年の気温を予測する)。

第3章 あまりに政治化された「地球温暖化」

1. 政治化された経緯をたどる(IPCCはCO₂による温暖化前提の組織/京都議定書のもととしたもの—エスカレートする途上国の主張), 2. 「地球温暖化」政策の背景(「地球温暖化問題」は国連が作り出した/金儲けの種にされた「地球温暖化」問題/世界の意識調査から見る「地球温暖化」), 3. 物理学者が見る「地球温暖化」問題(米国に見る物理学者の行動)。

第4章 今後とるべき政策を考える

1. 国内政策(CO₂を減らすより, 利用することを考えよう/エネルギー問題を考え直す/温暖化対策一辺倒をやめよう/「地球温暖化教育」を改めよう), 2. 外交政策(リオ宣言から逸脱した気候変動枠組条約/温暖化外交戦略は「守り」に徹すべし/「地球温暖化」対策からエネルギー対策へ), 3. これからとるべき道(地球環境とエネルギー問題の現状/生き残るために)。

付録1. 「気候感度と温室効果」は簡単な用語の解説である。付録2. 「気候科学の半世紀」では, 地球環境に関する観測の歴史を概観し, CO₂長期測定的重要性を示したC.D.キーリングと, 気候変動のコンピュータ解析を主導した真鍋淑朗の足跡と人となりを紹介している。

「あとがき」では, 地球環境研究・行政・世論が「地球温暖化防止」一本鎗のような状況について, 田原総一郎と半藤一利の言葉を引用して戦前の「国民一丸」の状況に見えると述べている。

「引用文献」では, 2015年までの180ほどの文献等が, 章・節ごとにまとめられている。

著者は中央大学名誉教授, 理学博士, 金属物理学, とくに金属—水素系の物性と材料科学専攻, 著書に拡散現象の物理(朝倉書店), 気候変動とエネルギー問題(中公新書)その他がある。気候学・気象学の専門家ではないが, 専門外の広範な文献を最近のものまで広くわかりやすく引用・説明している。文献表も最新のものとまで良くそろっており, 本文のどの項目も説得力がある。地球温暖化論に関心のある人や, 政治家, 関連の行政担当者らには必読の書であろう。

(吉田 勝)